九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学百年史 第10巻 : 資料編III

九州大学百年史編集委員会

https://doi.org/10.15017/1787570

出版情報：九州大学百年史. 10, 2016-12-28. Kyushu University
バージョン：
権利関係：

第 14 編

伊都キャンパスへの統合移転と病院地区の再開発

第１章　キャンパス統合の摸索

第１節　キャンパス移転の背景

899　九大　香椎沖埋め立て地に進出

（『西日本新聞』1990（平成 2）年 6 月 30 日朝刊）

九大　香椎沖埋め立て地に進出

評議会 50 ヘクタール取得を再確認

九州大学（高橋良平学長）は 29 日午後、評議員会を開き、福岡市が計画中の博多湾の香椎沖埋め立て地に約 50 ヘクタールの土地を確保することを再確認した。7 月上旬にも福岡市に対し、用地取得のための要望書を提出する。高橋学長は、土地の利用法について「今のところ、既存施設ではなく、新しい施設の設置を考えている」としている。

九州大では、キャンパスが手狭になったことで、香椎沖の埋め立て計画が持ち上がった十数年前から、用地確保の意思を表明していた。埋め立てに関する環境アセスメント（影響評価）を年内にも実施する予定の福岡市がこのほど、埋め立て地利用の有無など、大学側の最終的な意向を回答するよう打診。これを受けて、九州大は具体的な利用法はまだ煮詰められていないものの、とりあえず土地確保を福岡市に要望することで学内が一致した。

九州大は、将来構想計画の中で、春日市の総合理工学研究科同様、文系や生命医学系の学際大学院設置を打ち出しており、こうした施設への利用などが、今のところ予想される。

埋め立て計画は、福岡市の博多港港湾計画に基づき、同市東区香椎沖に造成される人工島で総面積は約 410 ヘクタール。港湾物流ゾーンやコンベンション、生活文化ゾーンなどを設ける計画で、平成 12 年が完成目標。

〔註〕原本縦書き。

900　九大新キャンパス　福岡市西部が浮上

（『西日本新聞』1991（平成 3）年 6 月 1 日朝刊）

九大新キャンパス　福岡市西部が浮上

専門委　候補地選定大詰め

キャンパスの全面移転問題を検討している九州大学（福岡市東区箱崎、高橋良平学長）の「新キャンパス策定専門委員会（教授ら 25 人で構成）」は 1 日から、移転候補地選定の大詰め作業に入る。その過程で福岡市西部の丘陵地（250 ヘクタール）が有

力候補地として浮上してきた。福岡市は同地区への移転に積極的に協力する姿勢を見せており、今後、学内の意見調整や文部省との協議が焦点となる。

九大は法、工、医学部など文、理系合わせて 10 学部を持つ総合大学だが、キャンパスは福岡市の東区箱崎に本部、同区馬出に医学部・付属病院、中央区六本松に教養部、それと同県春日市に理工系の学際大学院―などに分散している。

このため、以前から 1 カ所に集約し、教職員、学生など 1 万人規模の新キャンパスに移転する構想が持ち上がっていた。

新キャンパス専門委は昨年末、学長の諮問機関であった「キャンパス検討委員会」が「原則的に全学移転が必要」と答申したのを受け、今年 2 月に発足。移転候補地を中心に審議してきた。

これまで福岡市西部の丘陵地を含め、福岡県宗像市や同県粕屋郡篠栗町の九大農学部演習林、など数カ所を候補地として挙げ、用地面積、地形、交通機関の利便性、周辺の環境、地権者問題などを比較検討してきた。

その結果、まず福岡市内であること、全学移転に必要な 250 ヘクタールが確保でき、交通、環境面でも比較的に条件がよい同市西部の丘陵地が有力候補地として浮上した。既に、新キャンパス策定委のメンバーらは現地を視察、最終的な判断はしていないが、これまでの候補地に比べて高く評価されている、という。

福岡市は、大学側が移転を決めれば、用地買収交渉や交通アクセスの整備など、全面的に支援する意向を示している。

市側の都市戦略と一致

【解説】九大の移転候補地に福岡市西部の丘陵地が浮上したのは、最低限 200 ヘクタール以上の用地を確保したい九大の希望と、九大新キャンパス〝誘致〟を同市西部地区整備の目玉にしようとする市側の都市戦略が一致したためだ。

新キャンパス選定に当たって地元自治体の協力は今後の用地買収、跡地売却―再開発をスムーズに進めるために欠かせず、新候補地がこれまで取りざたされた他の数カ所に比べて一歩前に出たことは間違いないようだ。

だが、移転決定には数多くのハードルがある。文部省によると①大学による移転構想素案策定②文部省と大学の意見調整に基づく計画決定③跡地売却など移転財源の確保と予算化―など政府サイドの手順があり「大学独自で決めることはできない」とクギをさしている。

また、九大自体も、同専門委が福岡市西部案でまとまっても、最終的には評議会、教授会などで学内合意を得るまでには、より具体的な議論を積み重ねなければならない。さらに現在地での建て替えに動いている医学部・付属病院問題もある。関係者は「遅くとも秋までに結論を出したい」と意欲を示すが、最終決定までにはう余曲折が予想される。　（田代記者）

〔註〕原本縦書き。

901　九州大学のキャンパス移転に関する福岡市議会本会議質疑

（『福岡市議会会議録』　1991（平成 3）年 6 月 17 日）

〔前略〕

○31 番（手島敏文君）登壇　私は、福政会市議団を代表いたしまして、21 世紀における九州大学キャンパスのあり方と、福岡市の都市戦略につきまして質問をいたします。本問題に関し、九大と同じ町内の住民として、また、福岡市議会議員として、両面から取り上げてみたいと思います。

九州大学は、我が国第 4 番目の帝国大学として、明治 44 年に創立され、以来、本市の発展に果たしてきた役割は大きなものがあります。九州大学は、もともと京都帝国大学の分校として、明治 36 年に京都帝国大学福岡医科大学が設置されたのが始まりであります。当時、熊本、長崎と激烈な誘致合戦が繰り広げられ、一時は政府内で熊本に決まるなど二転三転したあげく、当時の松下市長を会長とする九州大学設置期成会などの活動が功を奏し、福岡設置が決まったのであります。福岡市の明治以降の発展を振り返ってみるとき、必ずしも九州第 1 の都市でなかった本市が、今日、九州第 1 の都市として発展するに至った大きな礎が、このとき築かれたのではないかと思うのであります。今後 21 世紀に向けて、本市がアジアの交流拠点都市として発展していくためには、九州大学の有する人材育成機能、学術研究機能はますます重要な都市機能として欠かせないのであります。昨年 7 月、九州大学において新キャンパス構想委員会が設置され、そこで 21 世紀における九州大学キャンパスのあり方について慎重審議がなされた結果、同年 11 月に高橋学長に対し、21 世紀における九州大学のあり方として、原則として全部局挙げて移転する統合型新キャンパス構想を早急に検討することを提言する、という内容の答申が行われております。また、その理由として、次の 6 点が挙げられております。

1、用地の規模の現状は 123 万 4,293 平方メートルであり、帝国大学系のキャンパスにあって最も狭隘である。その狭隘さは教養部に続いて文系 4 学部等で顕著である。

2、立地事情は箱崎地区、病院地区、六本松地区、筑紫地区、別府地区に分かれる分散型キャンパスを形成している。

　他方、学部学生、大学院生、外国人留学生等の推移は増加の一途をたどっており、各部局の教育研究将来計画に基づく必要用地は現用地の 2 倍強に達している。

3、また、大学の主要キャンパスである箱崎地区は航空機騒音も十分留意されるところである。

4、狭隘かつ分散型キャンパス事情が教育研究にとって望ましい環境ではない。

キャンパスのあり方についての構想は最も緊急かつ基本的な課題である。

5、現用地での再開発方法では到底目的を達しがたい。わけても 21 世紀に向けての、そしてアジアの拠点大学へと発展するであろう大学の将来を展望するとき限界がある。

6、昭和 47 年の春日原移転計画では病院地区を除く全部局の移転を評議会で決定したところであり、これに至った経緯・理由についてはその後何らの変化もない。その目的から次の諸点を配慮する必要がある。

1、統合型新キャンパスは一般的諸条件を具備するとともに原則として全部局移転を可能にするため、面積規模は 250 ヘクタールを超えることが望ましい。

2、教育研究上の便宜さ、及び各附属病院業務、図書館業務、社会人教育業務さらには産・官・学協力業務など開かれた大学としてできるだけ交通上便利な条件にあり、かつ都市機能と関係を充分配慮した位置にあること。

3、設営移転に当たっての教育研究上阻害を極力避けるため、短期間に全部局の移転を完了する方法を工夫するなど格別の検討を試みること。

4、統合型新キャンパスの確定に当たってはスムーズな移転を達成するためには大学の意思の形成決定に格別に配慮すること。

この答申を受けて、九州大学においては、移転候補地を検討するため、本年 2 月に新キャンパス策定委員会が設置され、現在その検討作業も大詰めの段階に入っているのであります。九州大学の移転問題は、その都市機能としての重要性から、また、移転先や跡地などのまちづくりの面から見ても、一九州大学の問題ではなく、本市全体の問題として、都市戦略上の重要課題であると考えます。大学の移転は、国内の他の事例を見ても 10 年、15 年とかなり長期にわたっており、九州大学の問題も随分先のように思われがちであります。しかし、この問題の重要性、あるいは本市の発展を考えた場合、今、早急に市当局と議会とが共通の理解のもとにこの問題に対応していくことが、大変重要であると考えるのであります。

そこで、九州大学の移転問題に対して、基本的にどのように考えておられるのか、市当局の御所見を伺います。

以上で 1 問目を終わり、2 問目からは自席にて質問を行います。

○副議長（古賀輝昭君）　渡邊総務局長。

○総務局長（渡邊正人君）　九州大学の移転問題に対する基本的な考え方についての御質問でございます。本市が目指すアジアの交流拠点都市づくりにおいて、学術研究や人材育成機能を担う大学の役割は重要でありますし、中でも九州大学の存在は、極めて大きなものがあります。本市は、昭和 63 年策定のマスタープランにおいて、これからの重要な都市戦略の 1 つとして、学術研究機能や人材育成機能の充実強化を掲げ、また現在、研究学園都市づくりを推進しており、市としても大学の教育・

研究環境の整備充実には積極的に協力､支援していく必要があると考えております。九州大学においては、総合大学としての学部等の充実、学生数の増加などに伴うキャンパスの狭隘化、分散化を解消するために、従来より統合移転問題についていろいろ検討されてきたところであります。本市といたしましては、今後、九州大学の動向を注意深く見守り、本市の都市戦略上、絶対に欠かせない存在であるということを念頭に、全面的に協力、支援していく考えでございます。

○副議長（古賀輝昭君）　手島敏文君。

○31 番（手島敏文君）　時間の関係もございますので、2 問目もここで読ましていただきます。新聞報道によりますと、本市西部地区の丘陵地が有力候補となっています。また、宗像や篠栗など 5 カ所を候補地として、新キャンパス策定委員会は検討されているようであります。大学移転問題については、学内の合意づくりのほか、特に国立大学の場合は、文部省との協議や跡地売却による移転費用の捻出など困難な問題が予測されます。また、移転用地の買収、跡地売却などについて、地元自治体の協力が欠かせないと言われています。九州大学の移転問題について、相当以前から検討されていたのでありますが、これらの問題もあり、現在まで実現していないのであります。経済のソフト化、サービス化や国際化、あるいは都市間競争など新たな潮流の中で、大学は新たな地域づくりの核として、その人材育成機能や研究開発機能が見直され、全国のいろいろな都市で盛んに誘致合戦が行われています。最近の国立大学の移転の例としては広島大学があります。これは、広島市から近郊の東広島市に移転したものであります。周辺都市への転出は、大学のレベルダウンや受験応募者の減少など、必ずしもうまくいってないようであります。九州大学の場合も、従来から周辺都市からの誘致があると聞いておりますが、現に最近も宗像市が積極的に誘致活動に乗り出す構えを見せています。九州大学については、京都帝国大学福岡医科大学の誘致のとき、あるいは九州帝国大学工科大学の開設のときの先人たちの努力を、我々は忘れてはならないのであります。その当時の経過を記した議会史や市史などを見ると、明治 36 年開設の京都帝国大学福岡医科大学の誘致に当たり、県は現金 25 万円と県立病院の土地、建物等を寄附し、福岡市は 4 万 7,570 円で、大正 4 年福岡市に合併編入された筑紫郡豊平村民有地約 2 万 6,000 坪を坪当たり 1 円 78 銭で買収し、キャンパスの一部として国へ寄附しているのであります。この金額は、当時の本市の予算額 21 万 8,116 円の約 21%を占める大変な額であり､誘致に際しての当時の人々の苦労や意気込みが感じられるのであります。また、明治 44 年の九州帝国大学工科大学の開設に当たっても、県が現金 25 万円の寄附を行うとともに、福岡市も 6 万 5,704 円で約 6 万坪の、昭和 15 年福岡市に合併編入された粕屋郡箱崎町の民有地を坪当たり 1 円 9 銭で買収し、キャンパス用地として寄附を行ったのであります。これも当時の市の予算 50 万 6,275 円の 13%を

占める大変な額であります。

さて、本市はマスタープランにおいて、学術研究機能の充実強化を掲げるとともに、福岡研究学園都市構想において、現在の大学のキャンパス整備など、教育・研究環境の整備を重点施策として挙げております。本市の学術研究機能の中で、九州大学が占める役割は極めて大きく、もしこれが市外に出ていった場合、本市の都市戦略であるアジアの交流拠点都市づくりに与える影響ははかり知れないものがあります。去る 6 月 10 日、九大誘致に関し、宗像市議会で緊急質問に至ったいきさつは、時間の関係もあり、また、本会議場での発言ははばかりますが、かつて福岡教育大学の宗像統合移転が、激しい賛否両論の中で決定、昭和 38 年 10 月、起工式が挙行されました。その実現の原動力は、何といっても出光佐三氏の寄附によりキャンパス用地の無償提供があったためです。移転の有無及びその場所については、最終的には九大自身が決めるとしても、市街化の進展とともに、現在地での新たな時代にふさわしいキャンパス整備が困難になっている以上、本市としても重要な都市問題の 1 つとして、移転の条件づくりなど積極的に対応すべきだと思います。当局の御所見を伺います。

次に、大学移転問題の推進において最も大事な跡地利用についてお伺いをいたします。箱崎、馬出、六本松などの地元は、九州大学とともに発展してきました。これら地元には、祖父の代から九州大学の存在を前提に生計を営んでいる人が多く、また、地域社会も大学を中心に成り立っております。このような地元と九州大学との関係は、いわば共生関係でありますが、このような中で大学が移転するということは、地元にとって、これを夫婦に例えて言えば、単身赴任どころか、別離を強いられようとしているようなものであります。このような地元のことを忘れて大学移転問題の進展はあり得ないのであります。過去、地元の関係で移転を思いとどまらざるを得なかった大学の例もたくさんあると聞いております。また、地元対策は、九州大学だけの問題ではなく、当然、市の重要な都市問題として、大学移転が周辺に及ぼす影響や、跡地利用など積極的な取り組みが必要であります。九州大学が移転した後の箱崎や馬出はどうなるのでありましょうか。九州、西日本のアカデミズムの雄としての大学機能を失うことは、地元にとっては大変な問題であります。地域の中心的なアイデンティティーを一挙に喪失してしまい、ただでさえ非戦災地区で木造家屋が密集し、都市基盤整備がおくれているところだけに一層心配であります。現在、大学の周辺地域において、JR の立体交差事業や香椎操車場の跡地開発などの計画があり、九州大学の移転を考えるのであれば、これら周辺プロジェクトも踏まえ、まず地域住民が、九州大学の移転によって、かえって都市改造の新しいチャンスが生まれてくると真に思えるような、魅力的な跡地の利用計画を地元に示していただきたいのであります。箱崎、馬出地区は、都心の周辺に位置し、また福

岡空港、博多港、博多駅、九州縦貫自動車道の福岡インターから至近の距離にあり、空、海、陸の交通ネットワーク上すぐれたポテンシャルを有しています。また、歴史的にも筥崎宮や崇福寺に象徴されるように、福岡の中でも最も由緒ある土地柄であります。跡地利用に当たっては、これら都市構造上のポテンシャルや地域性を踏まえ、新しい都市を構築するという気構えで、従来にない新しい都市機能を核に、本当に人々が住みたくなるようなニューライフゾーンを一体的に整備することを提案したいと思います。また、そのためには、従来にない若々しい発想と柔軟な思考が必要であり、例えば、企画構想室のようなものが考えられないものでしょうか。また、跡地利用計画は、移転が決まってからでは遅いのであります。早急に検討に着手すべきだと思うのでありますが、以上の点について市当局の所見を伺います。

○副議長（古賀輝昭君）　友池助役。

○助役（友池一寛君）　九州大学の移転につきまして、今、手島議員から御意見をも含めながらの御質問でございます。九州大学の統合移転につきましては、まだ決まったものではございません。しかしながら、今、御質問にもございましたように、昭和 40 年代から既に検討がなされておりまして、一時、春日原の米軍基地跡に移転をするというような、学内での意思の形成がなされた時期もあるわけでございます。非常に狭隘でもございますし、学術研究あるいは人材育成の機能にも支障を来しておるということは、関係者のみならず、だれもが認めておるところでございます。そこで今回、本格的な統合移転ということについて、大学内におきましては、相当突っ込んだ検討がなされ、その結論が出るのもそう遠くない時期であるということは聞いておるところであります。ただ、大学におきましては、今後学内での手続がまだ残されております。それから、文部省との協議も必要になりますし、また、最も大きな財源問題もございます。さらに、当然、移転をするということになりますと、移転先の用地を確保するということがあるわけでございまして、これらの大きな問題をクリアしなければならないわけであります。したがいまして、もうしばらくの時間を必要とするかと思います。しかしながら、この九州大学は、福岡市の都市の、この歴史の上におきましても、あるいはまた、市民とのかかわりにおきましても、そしてまた、この都市の構造の面からも、九州大学がどこに立地をされるかということは、この福岡市にとっては今後の大きな市政上の問題になるわけでございます。したがいまして、市といたしましても、九大の今後の検討の経過を見ながら、市内部におきましてもそれに対応する体制づくりなども進めていく必要があると考えております。

　ところで、他の市、特に宗像市あたりも九大の誘致に熱心であるということは、先日の新聞にも載っておりましたが、私どもも聞いております。しかしながら、九大の過去の設立の経緯なり、今までの歴史なりを考えました場合に、福岡市から出

ていくということは、私ども福岡市民にとりましては、これはまず考えられないといいますか、認められないことであると思っております。そうしたことにつきまして、そうした考え方につきましては、既に九大の当局には、市の考え方として伝えておりまして、恐らく九大としても市のそうした意向を踏まえながら御検討をされておるというように確信をいたしております。九大が、そこで、そうした市の意向等も踏まえながら、九大として、市内の他の地域に移転をされるということになれば、市といたしましても、このことについては、最大限の協力は惜しまないつもりでございます。

次に、移転をするとした場合の跡地の問題であります。これまでの地元との長い歴史もあり、大学の存在とともに成り立っております地域社会への影響など、地元の問題がまず重要な課題であると認識をいたしております。また、箱崎や六本松は、箱崎には約 48 ヘクタールの敷地がございます。それから六本松が約 9 ヘクタールの敷地になっておりますが、本市の都心の周辺に位置をしておりまして、それぞれの地域の中心として福岡市の都市構造上も重要な場所になっております。したがいまして、その跡地利用につきましては、本市の都市戦略上からの検討が必要となってまいります。もちろん地元の方々の御意向をも十分に踏まえて検討するということは当然であります。今後、九大の動向に即しまして、大学周辺の現況把握や跡地の利用計画につきまして、ただいまの御提案の趣旨も踏まえながら的確に対応していく必要があると考えております。

○副議長（古賀輝昭君）　手島敏文君。

○31 番（手島敏文君）　1 問目で申し上げましたように、議会と執行部が共通の理解に立ってと、今ということを申し上げました。今、御答弁、別に言質とるわけじゃありませんけど、もちろん評議委員会という最高決議機関の議を経てないし、いろいろと問題が残されておることはわかっており、私もきょうの質問については相当、これは非常に、ほかの福岡市の、今、桑原市長が手がけております 15 のプロジェクト、そういう問題とは甚だ違うと。また、過去の歴史を見ても、相当いろいろな問題があるわけでありまして、悩みました。しかしながら、10 年、15 年先、あるいは病院地区については、30 年先かもわかりません。しかしながら、今、策定委員会がですよ、もう早急に決めます。そしてまた、学長の任期が 11 月であります。再選はいたしません。そういう時期にあって、もし、そら将来合併も含めてありましょう。しかしながら、今、市外にという、もし、そういう声が、ある日突然は、そら今までの経緯から言いませんでしょうが、もし、上がってきた場合、それからでは遅いんじゃないでしょうか。同時にまた、10 年、15 年先だから、今やるんじゃないでしょうか。今までのいろいろな計画について、相当追い込まれてやっております関係上、やはり将来、振り返ってみて、お互いに禍根を残すという経緯があ

るんじゃないでしょうか。そういう意味で、私は質問をしたわけであります。経緯は、私も身近におる者として、十分、ある面では、今答弁をされた助役さん以外のことも知悉をいたしております。そういう意味で、過去の我々の大先輩が、工科大学誘致について今述べましたが、その経緯を振り返ってみて、やはり我々は、過去の大先輩が本当に並み並みならぬ努力をされたのは評価をいたしますが、結果論として、もともと福岡工科大学、今の本学の場所は、早良郡西新町が本命でありました。この記録を見ますと、早良郡西新町に行っていただくためには、4 万 5,000 円負担しましょうと、当時のですね。粕屋郡箱崎町地蔵松原、今の本学の場所に移転をしたら、2 万 7,000 円出しましょうと。結果は、当時は政令都市でありませんので、県から「前 2 個の条件中、いずれも市に於て不承諾なるに於ては、県は遺憾ながら大学設置の希望を放擲する事。」と三くだり半のような厳しい要請があってます。結果は、6 万 5,704 円の負担をして、今の、今は合併して福岡市になっておりますけど、箱崎町に来たわけであります。その間の運動の経緯が、ここにるる候文で述べられておりますけど、今から考えますと、西松原付近、いわゆる西新ですね、西松原付近は土地閑静にしてかつ空気、水、すべて良好と。「殊に同処は花柳の巷に遠く、付近の風俗もっとも淳朴なるを以て、従来県立中学修猷館その他種々の学校等は凡て西部地方に設置」されており、「而して将来大学教授の住宅御選定の上にも、また学生の下宿を求めらるる上にも西部地方もっとも便宜の点多く、故に学生養成の上より見るも、将に一般の便宜上より見るも、大学敷地については西松原をもっとも適当の位置と存じ奉り候。」と書いてある。それに比べて、今、私どもが住んでおります地域は「東部地蔵松原に至っては何分土地狭少にして、加うるに九州鉄道の線路その側を通断致し居り候につき将来敷地御拡張の必要相生じ候場合には頗る御不便利かと存じ奉り候。」という対比を出しておるんです。そして、しかもその運動に、何と当時の松下市長は、あ、今、失礼しました。松下市長から佐藤平太郎市長にかわってますが、当時の福岡の郷土の先輩の頭山満、山中初代市長、山座円次郎、進藤喜平太、金子堅太郎、いろいろな方々が運動しておるわけですね。その結果、そういうことになった。そして、最後の、何とかの非じゃないですけどね、福岡の西の誘致論者の東大教授の方が、福岡西部の西松原が退けられた理由について、市長あての書簡ですが、真野局長、これは文部省の局長ですね、当時の。「真野局長実地調査の結果、東の方に決定致し候故、もはや致し方無之候。福岡市の繁昌のためという頼み事は文部省にて無効に御座候」と。そして最後にまた、今まで西と東も対比しておったんですが「西の地形は長靴の如くである。」と。今、これは西新ですがね。「西の土地低くして干潮の時の外は、下水流れず不潔である由。」「西の方にも、いかがわし家など出来居り、東の方とさほど変りがない由。」と。「医科とあまり離れては不便であると（局長が）申しておる。」と。「西は東より汽車の便がよく

ない。」と。こういうことになったんです。本当にこれは大先輩の苦労に別にけちをつけるわけじゃないが、まあ今日はもう両方とも福岡市に合併しておりますから構いませんけど、当時はとにかくそういう条件を出してでも、しかも、とにかく 6 万 5,704 円以下で西を買収しますと、そして差額が出たら御寄附をしますということまで言って、執念を燃やしたわけです。しかしながら、結果は今の――もちろん医学部があるということもありましたでしょうが、今の経緯をたどってきたわけなんですね。だから、今言われたように、この際きちっと、もう移転が、時期それからまた方法は今後の問題としてですね、移転ということを前提に、内政干渉になるかもわからないけど、なおさら、福岡市のプロジェクトであればそら結構です。そうじゃないから、なおさら今きちっとですね、それは市長は腹に据えておっていただかないといかん。例えば、キャンパス構想委員会のメンバーにしても、それからまた策定委員会のリストにしても、何も多数派工作をする必要はないけどですね、少なくともそれらのやっぱり特に構想委員会のメンバーの中には、福岡市の附属機関やそういう機関にたくさん所属をされてますし、日ごろ福岡市ともうそれこそ離れられない、ほかの都市も、そら九州の大学教授さんですから、やられとるかもわからないけど、そういう点についても、甚だ、当局に要請をいたしましたけど、私の方が入手をする以外にはなかなかない。そういう状況で、果たしてどうなんだろうかと。今、先ほど申し上げましたように、そういう落とし穴、もうとにかく医学部については、長崎は 70 万寄附すると、福岡市は 50 万、これは地元の大先輩の方々がいろいろと努力をされて実ったわけですけど、そういうことについて、そういう前提をきちっと、この際もう一度ですね、くどいようですけど、共通理解をして、きょうから進めるべきじゃないでしょうか。宗像市議会の議事録も、要領ももらっておりますけど、先ほど、またくどいようですけど、教育大学の誘致についても述べました。

それからまた、この西区の問題についても、福政会市議団西田議員が質問をしましたが、桑原市長、菅原道真、とにかく学問の神様の本家筋に当たるということでありました。私も、かつて代表質問したときに、これだけの業績を短い期間で達成をされた。御本人の政治力、それから人徳もさることながら、御先祖様の、私は、たしか遺徳があるんじゃないかということも触れました。この西部地区については、桑原市長の、大部分領地がある。もうそれ以上は申し上げるといろいろ差しさわりがございますから、おわかりでしょう、あすこの地名は。それは別にその偶然でありましょうけど、少なくとも、やはりそういう点に立って、ぜひ、私は桑原市長の政治力と、それからまた行動力を御信用申し上げとりますが、なかなか、こういう非常に重要な問題でありますから、なかなか軽々に、議会の場でも、また、ほかの場でもありましょう。しかしながら、これはやっぱり今までにない大きなプロジェ

クトであり、福岡市が手がけておる問題じゃないだけに、なおさら一層考えるべきではないかと思います。私は昨日、板付に郷里の先輩の安倍晋太郎先生の遺骨を迎えにタラップまで行かしていただきましたけど、きょうが本葬でありますけど、市長は、たまたま東大の同期でありますから、「その人存すれば即ちその人政上がり、その人亡すればその政やむ。政をなすは人にあり。」そういう心境でありますが、市長は、ますますお元気でありますから、そういう意味ではぜひこの問題について、きちっとこの議会の場で表明してほしいし、また、それは合併の問題で答弁されたように、福岡、西日本の大都市圏のドンであります。そういう意味から、余りその、受ける者の立場、追われる者の立場として、しにくいところもありましょう。しかし、ここは福岡市議会の本会議場であります。市長は、大都市圏の雄である前に、福岡市長であります。これは言わずもがなであります。そういう意味から、私は、跡地の問題についての私の構想を、これは私もわずか数日間でありまして、関係の先輩の方々からお知恵を拝借いたしましたが、よく考えてみますと、この、今福岡市が桑原市長を先頭に 15 の大きなプロジェクトを展開しております。天神、博多駅、シーサイド、ドーム、須崎ふ頭、中央ふ頭、香椎人工島、操車場、それから空港、インター、ちょうどこの九大病院、本学は、これからいきますと中心であります。この 15 のプロジェクト、これを仕上げていく。このプロジェクトがちょうど最終的には同じぐらいの年月を要します。そういう考え方で、かつては崇福寺やあるいは聖福寺やあるいはまた筥崎宮、博多商人の発祥の地でもあります。そういう意味から、新しい視点に立って御検討をいただきたいと思います。

まだこげんともあります。これを見られたらわかります。ただ、残念なのは、箱崎ふ頭の沖に焼却場ができることであります。しかし、これも必要であります。少なくともそういう問題があるだけに、なお一層、地域住民、あるいはまた、それが災い転じて福となすような、私は桑原市長ならでき得ると思います。また、それを支えております優秀な執行部の方々はできると思いますから、ぜひそういうことをお願いをいたしますし、また、たくさんいろいろとこの構想に当たってのテーマやそういうものもあります。しかし、決してその、追い出しコンパをしておるわけじゃございません。少なくとも最後の最後まで、それは慎重に考えるべきでありますけど、諸般の状況から、私はどんなことがあっても、これは移転を前提に、もうきょうから考えなきゃいかん。また、港湾局やあるいは企画室、企画課、あるいはまた助役さんの段階においても、それは既成の事実として具体的に問題がなされておるわけであります。そういう点に関して、これはもうほかのプロジェクトと違う大変大きな問題であります。五百数十億の九大の予算、これは今もうこれだけ発展した福岡市の中で経済的な波及効果としては、ないとは言えません。もちろん付近の商店やいろんな関係の方はありますが、福岡市全体の経済効果としては、バランス

としては、少ないかもわかりませんけど、少なくとも、これからアジアを見るときに、これからアジア周辺、オーストラリア、そういう周辺を見るときに、福岡市が一番近い位置にあると市長は言われておる。その受け皿の重要な役割を、ソフトな受け皿を果たしておる。市長は、これから 15 の大きなプロジェクトもあるが、ソフトな面でこれからいろいろな面を展開していきたいということをいみじくもおっしゃっておる。なおさらそういう受け皿の変革というのは、一番これは桑原市政の、一番大きなアキレスけんじゃないかと思います。そういう意味で、まだ時間も少しありますけど、むしろこれは私がるる述べるよりも、市長がここで決意を込めて答弁をしていただきたいし、本市の都市戦略上、絶対にこれはもう市外に出しちゃならないと、そのためには、全市一丸となった組織を、補正を組んででも、調査費を組むなり、これだけのやっぱりプロジェクトをやる――住宅供給公社や都市未来やこれぐらいの規模じゃ、失礼ですがなかなか負えんじゃないですか。都市科学研究所でさえも、もうばんと打ち出しとるでしょう、空港の問題をですね。九大も戦術戦略あります。打ち出し方については、これはあります。しかしながら、必要であります。そしてまた、地元住民が、今申し上げましたように、夢を持てるような、総論各論、今あります。3 分の 1 以上はもう昔の地元の方じゃない。毎年かわっていきます。だからもう何というか、こう空気のように、九大、箱崎宮ってのは空気のようなもんでありまして、おらなくなったときのことは考えておらないわけですから、そういう意味でひとつこの問題について、市長の具体的な決意のほどを御返答いただきまして、私の質問を終わらしていただきます。

○副議長（古賀輝昭君）　桑原市長。

○市長（桑原敬一君）　大変貴重な御意見を交えた御質問でございます。私も九大移転につきましては、前々から、福岡に来る前から聞いておりましたけれども、極めて重要な、福岡市にとっての課題であるというふうに思います。で、参りまして、まず私は九州大学と、日ごろから十分に意見交換、情報交換しなきゃならんということで、九州大学と福岡市の首脳部との定期会談を持つことにいたしました。もう数年、毎年 2 回ないし 3 回やってます。事務段階でもやっておりますが、定期的な協議のメンバーは、学長、それから各全学部長、それから事務局長ほか各部長そろった中で、常々この移転問題も協議をし、そしてそれ以外のことにつきましても、常に新しい、九大の、まあ何と申しますか、いろんな面で改善、学部の増設、そういうものもお話を聞いてまいっておりまして、日ごろからのそういう接触が大事だろうというふうにしてまいりました。したがって、私はその会議に、これは田中学長のときからで、私のつき合いでございますけれども、常々九州大学が本市においていかに大きく役割をされて、そしてまた、福岡市の発展に極めて重要な役割をしておるか、したがって福岡市内で常に立地をしてほしいということを申し続けてき

たわけであります。最近特に動きが活発になりましたので、図書館から九大誘致の経緯を書いた資料を取り寄せまして、当時の議会の応答の模様、それから市長の意見、そういった議会と執行部との一致したこの誘致に対する取り組み、そういうものも全部掌握をいたしております。当時、御指摘のように、長崎、熊本の方が上の市でございました。福岡市は九州 3 番目のまち、そういうような状況の中で、大変熾烈な、激烈な誘致合戦の中で、九州大学が誘致されたことも十分承知をいたしております。当時の金で相当な額も協力されたやに聞いております。そういった先人のとうとい努力のおかげで今立地をいたしております九大だけに、私まず第 1 の方針といたしましては、九大は絶対に福岡市外に出ていっては困るという方針を立てておるわけでございます。そういった意味で、先ほど申し上げました、幸いに、極めて学長とは同期の友達でもございますから、そういったことも個人的にも十分に、これまで口酸っぱくなるように申し上げております。これから大事なことは、議会と執行部とが一緒になってこの問題に取り組んでいかなければならないというふうに思っております。ただ、私は福岡市のために九州大学を残すというけちな感情を持っておるわけじゃございません。九州大学というのは、九州のために学問研究をやる学問の府でありますし、人材育成の大学でございます。で、その人材、学問の成果というものは、全部九州に一様に出しているわけでございます。ただ、私はやはりこういった九州の情報、学術、そういうものの都市機能の集積というのは、やはりアジアの拠点都市を見習う福岡に立地することが、福岡のためだけではなくて、九州全体のためになるんだと。空港もあります。交通の結節点でもあります。歴史も深いわけであります。文化の蓄積もあります。そういうところに私は立地すべきでありますと。そのことが九州全体に大きな波及効果を及ぼすという意味におきまして、私は自信を持って福岡市に立地してほしいということを言い続けてまいりました。これからも言い続けてまいります。そのために、第 2 の方針といたしましては、恐らく近いうちに方向が決まりましょう。また、早く決めていただきたいと思うわけであります。で、そのときには、私は議会ともども最大限の協力を申し上げたいということをお約束したいと思っております。それから、3 番目には、今御指摘のように、この九大が立地して、明治 36 年、ずっとこの地域の中で大きな役割、経済的にも文化的にも役割をしてきた、その地域の中から出ていかれるということになりますれば、私は大変大きな影響があるだろうと思います。そういった意味におきましては、十分に実情把握をしなきゃならんというふうに思います。しかし、私は今の狭隘な中でのキャンパスが十分機能してないということ、そしてまた、ああいう狭い、交通の非常に渋滞している中で、また、地域の住民の方が大変お困りになってるという面もあると思います。むしろ、移転された暁においては、積極的にこの地域の再開発に取り組む、21 世紀のビジョンを持った、そして今お話しのよ

うに福岡市全体の多核的な都市構造の構築の中で、私はこの移転跡地について取り組んでいきたいと思います。そういう方向が九大から出ますれば、直ちにプロジェクトチームをつくって、その跡地についての 1 つの大きな、何と申しますか、デッサンと申しますか、1 つの構想を固めたい。こういうふうに考えております。ただ、まあ九大は九大なりの事情がありまして、公式にはまだ御発言ございません。ございませんけれども、私どもは方向としては、いずれかの時期に、そう遠くない時期にそういう時期が来ると、そういう情勢の中で積極的に情報を収集し、そして対応を誤らないようにし、そして議会ともども協議申しながら、積極的な対応をしてまいりたいと、かように考えます。

〔後略〕

第 2 節　キャンパス移転の決定

902　九大移転　元岡地区で検討

（『朝日新聞』1991（平成 3）年 9 月 28 日朝刊）

九大移転　元岡地区で検討

学長、将来計画委に提示

九州大学の高橋良平学長は 27 日、福岡市内などに分散している九大の統合移転候補地として、同市西区元岡地区を学内に設けた将来計画小委員会へ提示した。今後、各学部などでの意見集約を急ぐ。九大の移転問題は、新たな進展を見せることになりそうだ。

元岡地区は福岡市の西端に当たり、現在は山林や農地となっている丘陵地。移転に必要な土地約 250 ヘクタールの確保、交通の便など、「ほかに比べ、立地条件としての欠点が少ない」（込山進・九大事務局長）ことが、選ばれた理由だという。

今後、将来計画小委を通して学内の意見集約を急ぐ。

協力を打ち出している福岡市のほか、文部省や地権者などとの話し合いも残されており、決着にはまだ時間がかかりそうだ。

友池一寛・福岡市助役の話　移転先は市内で、と考えていただけに大歓迎だ。土地の買収などには全面的に協力する。

滝口凡夫・宗像市長の話　私は宗像市が適当と思っている。最終決定とは受け止めておらず、事情を調べて対処したい。

〔註〕原本縦書き。

903　九州大学新キャンパス移転構想（学長試案）

（「第 1218 回評議会記録」　1991（平成 3）年 10 月 22 日）

九州大学新キャンパス移転構想（学長試案）

1.　九州大学の新キャンパス問題については、先に「新キャンパス構想委員会」において検討をいただき「21 世紀における九州大学の在り方として、九州大学が原則としてその全部局をあげて移転する統合型新キャンパス構想を早急に検討することを提言」していただきました。

2.　この提言にもとづき「新キャンパス策定専門委員会」を設置し具体的な候補地について立地条件等を専門的に検討していただくとともに、併行して行財政上の諸問題等を検討して参りました。

3.　その結果、九州大学がキャンパス移転する理由として、次のように集約できると思います。

1）21 世紀に向けて大学の将来計画を展望するとき、現地再開発では不可能であること。

①　当面急がれる教養部の改革についてみても、本学においては教養部と文系 4 学部及び理学関係学部・研究科と一体として改編を検討しており、分散したキャンパスでは効果的な編成ができない。

②　今後、九州大学が大学院大学として発展するためには学際大学院等学部を越えた編成が重点課題となっており、それらの実現については、統合型キャンパスが必要である。

③　国際研究交流の推進に伴い、留学生、研究者の増加に対する施策の遂行に支障がある。

④　大学の教育研究は不断の見直し改革が必要であり、それに伴う施設の充実についても現キャンパスでは支障がある。

2）現在のキャンパスの立地条件が不適切であること。

①　六本松地区については、すでにその狭隘化が問題になっており拡充が不可能であること。

②　箱崎地区については、航空機騒音が教育研究の支障原因となっているとともに事故再発の懸念も一掃されてはいない。

4.　移転対象地区は、当面六本松地区及び箱崎地区とすることにいたしたいと思います。

（病院地区については、医学部附属病院の現在地での再開発が緒についていること。春日原地区については、所管換を前提に財務局の使用承認を得て、現在施設の整備途上であることを考慮すると当面の対象から除外する。）

5.　移転候補地については、新キャンパス策定専門委員会に検討していただきました

5 候補地のうち、M 地区を第 1 候補として検討をお願いしたいと思います。

選定の理由は、

①「新キャンパス策定専門委員会」における種々の専門的観点からの検討の結果キャンパス用地として十分な条件を備えていること。

②用地取得・周辺都市計画及び跡地処分等についての対応が円滑に進められると思料されることであります。

6.　移転の順序は委員会等を設けて検討することといたしますが、当面の改組計画、跡地処分等を考慮し、教養部、文系 4 学部を優先させることになると思います。

904　九州大学の元岡・桑原地区への移転に関する福岡市議会本会議質疑

（『福岡市議会会議録』　1993（平成 5）年 3 月 10 日）

〔前略〕

○18 番（小川周一君）登壇　私は、福政会を代表し、我が党の木原正勝議員の代表質問を補足して、九州大学の移転問題についてお尋ねするものであります。

まず、九州大学の移転先のまちづくりについてお尋ねいたします。「智者は海を愛し、仁者は山を愛す」という言葉があります。これは、論語の一節であります。今回、九州大学移転用地が約 275 ヘクタールに決定し、九州大学より市当局にその用地確保について検討依頼があったところでありますが、元岡・桑原地区は、南に筑紫山脈の山並み、その前に広がる糸島平野、北に対馬海流の暖流が流れ、温暖な地帯であり、志摩山系の丘陵地帯、特に全体が公園とも言えるすばらしい自然環境の中にある地域であります。九州大学では、統合型新キャンパスのあるべき姿について、「本学の将来構想は、その実現が現敷地の諸条件のもとでは不可能であることより、新キャンパスへの移転統合を前提として策定している。　新キャンパスにおける各種の教育研究施設、実験施設、福利厚生施設、文化・スポーツ施設等の整備には、ソフト・ハード両面よりインテリジェントキャンパスとして、すべてを有機的な連係のもとで効果的に機能させることにより基幹総合大学の名にふさわしい教育研究環境を創造することを基本とする。　また、新キャンパスは地域の都市計画でも中心的な役割を果たすよう自治体と協調した整備をするとともに、周辺の自然景観との調和を図り、環境保全、省エネルギー、資源リサイクル等にも十分配慮する。移転跡地の歴史的建物や庭園は保存するよう利用計画に参画し、公開講座等の施設として、地域社会との協力・交流の場を都心部にも確保する。」。こういうことで、そういう考え方の中で、九州大学は、一昨年の 10 月に大学評議会で本市西区元岡・桑原地区への移転の方針を決定し、その後、学内や文部省、大蔵省との協議を経て、昨年 12 月には政府予算案に調査費の計上を見、また総面積約 275 ヘクタールという、大学のキャンパスとしては我が国最大級の面積が決定され、本年 1 月末には用

地の確保についての検討依頼が九州大学から福岡市に対してなされたところであります。また、新年度予算において 1 億 3,000 万余りが計上され、組織体制も、大学移転対策局として充実強化されると聞いております。九州大学の移転は、まちづくりの面から見ますと、移転先である本市西部地域、また移転跡地である箱崎、六本松地区において大規模な都市開発が必要であり、その規模は、本市の都市構造を変えるほどのものであると予想されます。旧 7 帝大の移転のモデルケースとして、世界に誇る大学として立派な大学を建設してほしいものであります。私たちが前高橋学長に会わせていただきましたとき、前学長が、大学移転用地が孤立したものでなく、赤ちょうちんのまちも一緒につくってくださいよというお話をしていらっしゃいました。そこでまず、九州大学の移転を契機とした西部地域におけるまちづくりについてお尋ねをします。西部地域は、都市化が進んだ本市において、糸島半島のすばらしい自然地域でもあり、九州大学の移転を契機とした当地域のまちづくりの成否は、本市の将来を左右すると言っても過言でないと考えるものであります。また、今回の移転は、本市有数の営農地域に 1 万 4,000 人もの学生、教職員を有する大学が移転してくるわけで、元岡・桑原地区を初めとする地域の人々の生活を一変させるほどの影響があると予想され、大学との調和のとれたまちづくりや集落の振興など、地域に根差した移転先のまちづくりについて課題は多く、極めて重要であります。さらに、当地区の計画づくりに当たりましては、既に計画が進行中である伊都地区や今出地区などとの整合性を図りつつ、全体としてバランスのとれたものにする必要があると思います。まず、伊都地区につきましては、将来、糸島地域全体の中心地として計画を進める必要があると考えますし、伊都と元岡・桑原地区との間に位置する、住宅・都市整備公団が土地区画整理事業を構想中の今出地区などにつきましても、西部地域全体の中で機能分担を考えていく必要があると考えます。また、交通計画についても、伊都地区から南北の道路、今出などの整備にあわせ、南北道路の幹線道路を整備すべきであると考えます。この道路につきましては学園通りとして、後世に憂いを残すことのないよう、百年の大計で取り組んでいただきたいと思います。九州大学の移転用地の確保は、平成 6 年度を目標に行うと聞いております。そうしますと、西部地域における道路を初めとする各種インフラ整備計画も並行して定める必要があるのは、至極当然のことと考えます。また、九州大学の移転スケジュールと関連する各種のインフラ整備のスケジュールとの整合を図る必要があると思いますが、当局の所見をお尋ねいたします。

次に、移転跡地のまちづくりについてお尋ねします。移転跡地となる箱崎、六本松は、九州大学とともに発展してきた地域であり、今回の移転の影響は、大変大きいことが予想されます。両地区のまちづくりに際しましては、地元の意向を十分勘案し、地域の振興を図る必要があります。両地区は、本市マスタープランにおいて

も副都心に次ぐ地域中心として位置づけられ、また、都心部に近接した両地域に出現する、あわせて 57 ヘクタールもの規模の跡地、これは県庁跡地に建設中の福岡県国際会館の敷地の約 44 倍もの規模であり、本市の目指す多核型都市構造の形成のための千載一遇のチャンスであり、大所高所からのまちづくりが必要であります。そこで、移転跡地となる両地域につきましても百年の大計でまちづくりに取り組んでいただきたいと考えておりますが、その計画策定は、九州大学の移転の動きに合わせて適切に進める必要があります。そこでまず、両地区の計画策定のスケジュールについてお尋ねいたします。

次に、九大移転に関しまして、農業問題についてお尋ねをいたします。九大移転予定地であります大字元岡・桑原地区を含む元岡地域は、古くから第 1 次農業構造改善事業によるミカン園の造成を初め、瑞梅寺川地区、東元岡地区などの圃場整備や暗渠排水事業などを実施してまいりました。また、農業の近代化を図るため、野菜、花の園芸施設団地の造成や畜産団地の整備、農村広場などの農業振興事業を推進し、生産性の高い農業の確立と農村地域の活性化に努めてきたところであります。しかしながら、輸入自由化や農業を取り巻く厳しい農業情勢の中、ミカン園再編成対策により、野菜、花など他の作物へ転換するため水田地帯へ経営の中心が移り、廃園化した樹園地が多くなってきたことなどにより、大学誘致を積極的に進めてきたところであります。大学移転は、地域発展のため大きな期待がある反面、この元岡地域は農家の割合が高く、農業後継者を中心に積極的に農業投資を行い、農業に希望を持って意欲的に取り組んでいる農家もございます。私は、九州大学の移転先用地の確保、西部地域のまちづくり及び営農希望者に対する農地の確保の 3 つは、一体的に解決する必要があると考えます。したがいまして、まちづくりにあわせて農地の再編成が必要と思いますが、この点について、当局の御見解をお尋ねいたします。

以上で 1 問目を終わり、2 問目からは自席で質問させていただきます。

○議長（大神研裕君）　渡邊総務局長。

○総務局長（渡邊正人君）　まず、九州大学の移転スケジュールと関連する各種インフラ整備のスケジュールとの整合性についての御質問にお答えをいたします。九州大学の移転の年次計画につきましては、昨年 10 月に九州大学が設置した新キャンパス計画専門委員会において検討が続けられておりまして、移転スケジュールにつきましても、今後、その中で明確になっていくと伺っております。全体のおおよそのスケジュールにつきましては、用地の確保、造成工事の後、順次校舎などの建設工事が行われることとなっておりまして、数回に分けて移転が行われ、全部の移転が完了するまで 15 年程度の期間がかかるものと想定いたしております。市といたしましては、道路、上下水道等のインフラ整備につきましては、九州大学の移転ス

ケジュールに十分配慮することが必要であると考えており、今後、本市西部地域全体のまちづくりの検討の中で整合性を図ってまいりたいと考えております。

次に、九州大学の移転に伴う箱崎、六本松地区のまちづくりの計画策定のスケジュールについてでございます。その検討を行うに際して、九州大学の移転の年次計画と密接な関連があるわけでございますが、新キャンパス用地に順次校舎等が建設され、現キャンパスから数回に分けて移転が行われるということでありますので、跡地が利用可能となるまでには、早い区域でも 10 年近くの期間を要することが見込まれます。したがいまして、箱崎、六本松地区のまちづくりの計画を策定するに当たりましては、九州大学の移転スケジュールとの整合性に十分配慮しながら、今後検討してまいりたいと考えております。

○議長（大神研裕君）　安東農林水産局長。

○農林水産局長(安東義介君)　九大移転に伴う農業問題についてお答えいたします。元岡地域は、農業構造改善事業などによる圃場整備を中心とした土地基盤の整備を初め、高度園芸施設団地の造成などを行い、礫耕トマトやイチゴなどの野菜や花の施設園芸を中心に畜産や稲作経営等が営まれ、また、農業後継者も多く、本市における重要な農業地帯であります。このため、九州大学の移転に伴う地域農業の再編につきましては、新学園計画との整合を十分図りながら、国、県など関係機関、農業団体、さらには地域農業者との協議を重ね、今後とも農業を振興すべき地域については、営農意欲の高い農家が安心して農業に取り組めるよう努めてまいります。さらに、将来は、九州大学の研究の成果などをこの地域の農業の発展に取り入れ、地域農業の一層の振興を図ることなども構想してはどうかと考えております。

○議長（大神研裕君）　小川周一君。

○18 番（小川周一君）　それでは、ただいまの答弁を踏まえて、2 問目に入らせていただきます。

まず、九州大学の移転用地の確保についてお尋ねいたします。九州大学の移転事業は移転先用地の確保に始まるわけでありますが、移転先となる元岡・桑原地区におきましては、平成 3 年に九州大学誘致発展期成会が組織され、九州大学の円滑な移転に向けて積極的に活動されていますが、275 ヘクタールの区域で 600 人を超える地権者からの用地買収は、本市において、かつてないほどの規模であります。今後の移転事業を速やかに進めていくためにも、地元の合意形成を図りながら用地買収を円滑に進める必要があると思います。九州大学の移転用地の確保につきましては、九州大学より福岡市に対し、去る 1 月 29 日に用地確保についての検討依頼の要請がなされましたが、移転先の用地確保についてはどのように進めていくのかお尋ねをいたします。

次に、元岡・桑原地区は、約 2,000 年から 3,000 年前の遺跡である元岡瓜尾貝塚

の存在からも明らかでありますように、古代から人々が生活を営み、歴史を刻んできた地域であります。そのため、丘陵部を中心に多くの埋蔵文化財が認められておりますが、九州大学移転用地のエリア決定に当たり、どのような取り扱いをなされるのかお尋ねをいたします。

次に、九州大学の新キャンパスづくりに対する市の姿勢をお尋ねいたします。九州大学は、明治 36 年の創立以来、高度な学術、文化、教育、研究開発機関として、また優秀な人材の供給という面からも、福岡市の発展に極めて重要な役割を果たしてまいりました。その九州大学が、このたび世界的水準の教育研究の拠点を目指し、本市西部地域に移転するわけですが、新しいキャンパスづくりに当たりましては、高度な学問水準はもちろんのこと、移転先での地域や市民に広く親しまれる真に開かれた大学を目指してほしいと考えております。九州大学における、地域に開かれた新キャンパスづくりについて、市はどのようにお考えになっているのかお尋ねをいたします。

次に、伊都地区の土地区画整理事業についてであります。最近の地域を取り巻く社会的状況の変化は目まぐるしく、平成 10 年 JR 筑肥線の一部複線化案や国道 202 号線バイパスの西区周船寺～前原市東間の今春開通などの交通体系の充実強化が図られ、これに伴い、周辺では幾つかの区画整理が計画され、施行されております。このような状況が今後も引き続いて起こり、沿線、沿道を中心に市街化がさらに進んでいくと思われます。このような中、元岡・桑原地区への九州大学移転が本決まりとなったことにより学園都市構想がにわかに浮上するなど、地域一帯が一段と都市化の様相を呈してきております。しかしながら、当地におきましては、一部の市街化区域内の道路等を除けば、この拡大、進展する都市化の受け皿となる基盤施設が貧弱であり、このような変化に十分対応できないのではないかと、非常に危惧をしているところであります。そこで、地域の将来の発展を考えますと、この都市化を円滑に運ぶことが必要であり、まず、都市化の受け皿づくりを早急に行うことが現在一番重要なことではないかと考えております。このためには、地域の中心的役割を果たす伊都地区のまちづくりにより基盤整備を行うことが不可欠であります。福岡市は、西区今宿～周船寺間約 180 ヘクタールの区域において土地区画整理事業の調査を積極的に進められており、その先行的に整備を図る区域約 105 ヘクタールが平成 4 年の 5 月に特定保留として位置づけられ、事業化への一歩を踏み出しましたことは非常に喜ばしいことであり、地元一同一層の期待を寄せているところでありますが、特に特定保留となった地区について、一日でも早く事業に着手されるよう強く望むものであります。そこで、お尋ねいたしますが、伊都地区の土地区画整理事業において特定保留となった先行的に事業化を図られる地区について、現在の進捗状況と今後のスケジュールをお聞かせください。また、第 3 地区は第 1 地区と

同様に本区画整理の中心部に位置しており、この地区の取り扱いいかんによっては、計画的市街地の形成が中途半端に終わってしまうおそれがあります。御存じのように、ここには福岡大学のグラウンドが地区の中央に広がっており、本区画整理の計画に大きな影響を与えることと思われますが、このグラウンドに対する取り組みについてもお聞かせください。

次に、瑞梅寺川以東のまちづくりの中での今出、田尻、北原地区の現況と今後の進め方についてお尋ねいたします。瑞梅寺川以東の地区につきましては、戦前は飛行場として使用されていたものが、戦後、地域の農業者によって開拓され、水稲や畑作が行われ、特に今出レンコン畑として、福岡市の近郊に知られた優良な農地として数十年にわたって耕作されてきたものであります。しかしながら、近年は、市街化調整区域でも可能な開発の波が顕著にあらわれてきつつあります。特にベッドタウンとしての位置づけによって、横浜地区、泉地区の組合施行の土地区画整理事業によって住宅化がなされておるところであります。まちづくりの手法としては土地区画整理事業が最もすぐれた手法と考えており、将来もこの手法によって事業が進むと思われますし、現に横浜地区に接して横浜西地区の土地区画整理事業が昨年から進められております。さらに、昨年度から今出地区の 160 ヘクタールについて、住宅・都市整備公団がまちづくりに取り組んでおりますし、泉地区に接した田尻地区につきましても、地元の皆様によってまちづくりが計画されておりますが、これらのまちづくり地区に囲まれた部分となる北原地区についてもまた、まちづくりの必要があります。また、これらの地区は、九州大学の移転先である元岡・桑原地区、伊都地区との間に位置するため西部地域のまちづくりの中で役割分担を明確にし、計画を進めていく必要があります。それにより一体的なまちづくりや基盤施設整備も可能となります。そこで、これらのまちづくりを計画中の地区につきまして、現在の進捗状況と今後の進め方についてお尋ねいたします。

次に、交通問題についてお尋ねいたします。九州大学を含めた西部地域のまちづくりには長い年月を要するものと思いますが、まちづくりは、着実に一歩一歩、歩みを進めていくべきでありますし、段階的、地域的な取り組みの集大成としてすばらしいまちができていくものと確信をいたしております。ただ、1 つ気にかかることがございます。本市のまちづくりの現況を眺めてみますと、周辺部の幹線道路の不十分さが指摘できると思います。それらの地域の 1 つ 1 つを見てみますと、土地区画整理事業などにより、地域の道路は一通り整備されております。ただ、それらの地域を結び貫く幹線道路が整備されていないといった例が見受けられるのであります。こういった状況を考えてみますと、交通問題については、開発計画に際しまして、当初から広域的、長期的視点を持つことが重要であり、その視点に立った段階的整備が最も望まれることだと考えております。私たちは、そういった点からも、

誇り得るべき先輩たちを擁しております。福岡市を支えます都心部には、渡辺通り、昭和通り、大博通りの 50 メートルの幹線道路があり、文字どおり都心機能を支える大動脈となっております。今日の福岡があるのも都心部の繁栄であるとすれば、まさに今日の都心があるのは、あの 50 メートルの道路のおかげであります。それらの道路は、何と昭和 21 年に計画され、整備に着手されております。当時の自動車台数は、昭和 25 年で約 4,000 台足らずでありますから、当時は何が通る道路なのかと猛反発を受けたと伝え聞いております。当時のまちづくりに従事された方、またそれらの事業に協力された市民の方々に深く敬意を表するものであります。また、私たちが東京に参りますと、必ず空港から JR 駅までモノレールに乗車いたします。延長が 13 キロメートルほどで、1 日 13 万人もの利用があり、経営は、年 10 億以上の黒字と伺っております。開業いたしましたのはあの東京オリンピック開催のときですから、30 年近く経ております。あのモノレールにいたしましても、当時はだれが利用するのかといった異論があったと聞いております。これらの話を考えましても、改めて交通問題には幅広い視点を持つことが重要であるのがわかる次第であります。移転先周辺の交通状況を考えますと、東西方向の主要交通網であります JR 筑肥線や国道 202 号線バイパスあるいは西九州自動車道を最大限に活用し、移転先を含めた糸島半島部の振興を図っていくためにも南北方向の幹線道路を配して基盤整備を行っていく、こういったことが基本になると思うのであります。ただ、市域内だけでの交通計画を行い、東西方向と南北方向を単に連結するだけでは交通処理上も効率が悪くなりますから、ループ状に、環状型に連係を図っていく、また、これらは周辺のまちづくりを考える上でも非常にいい影響をもたらすものと思うのであります。そういたしますと、周辺の状況からも隣接市町を含めた広域的な交通計画を検討する必要が生じてまいります。また、九州大学の移転先を含め西部地域のまちづくりは、東のアイランドシティ計画と並ぶ一大プロジェクトであります。長期的視点を持ち、よりサービス水準の高い新しいまちづくりを行っていくことが重要であります。そのためにも、広域的な視点から交通計画を考えるとともにさらには新交通システムを含めた基幹的な交通施設を検討していくべきだと考えますが、御所見をお尋ねいたします。

次に、移転跡地のまちづくりについてお尋ねいたします。移転跡地のまちづくりにつきましては、地域の実情を見据えたミクロの視点と、全市をにらんだマクロの視点の両方が必要だと思いますが、平成 5 年度は具体的にはどのような検討を行われるのかお尋ねいたします。

○議長（大神研裕君）　渡邊総務局長。

○総務局長（渡邊正人君）　まず、九州大学の移転先用地の確保の進め方についての御質問でございます。九州大学から去る 1 月 29 日に用地面積約 275 ヘクタールの

確保方の検討依頼を受けまして、既に地元関係者とその区域についての協議を行っているところでございます。その区域が確定しました後、九州大学より用地取得の依頼を受けまして、市土地開発公社による代行取得を行ってまいります。用地確保の円滑な推進に当たりましては、地元の方々の積極的な御協力が不可欠でございます。今後、用地交渉の進め方を初め、地元の方々と十分協議を行い、平成 5 年度より 2 年間を目途に用地の早期確保に向けて精力的に取り組んでまいりたいと考えております。

次に、九州大学の移転用地のエリア決定に当たっての埋蔵文化財の取り扱いについてでございます。九州大学移転先予定地である元岡・桑原地区につきましては、丘陵部を中心に相当数の埋蔵文化財が確認されております。大学用地の区域決定に当たりましては、埋蔵文化財の分布状況や地形、土地利用状況などを考慮し、九州大学の意向や地元の事情を十分勘案しながら検討してまいります。

次に、九州大学における、地域に開かれた新キャンパスづくりについての御質問でございます。九州大学においては、昨年、センターオブエクセレンス、すなわち世界的水準の教育研究の拠点の構築をうたった新キャンパスの基本構想が策定されまして、この中で、「地域社会との交流をめざして、社会人の再教育、生涯学習の実践等を通じて、大学としての教育研究成果の社会への還元を図る。」ということがうたわれているところでございます。本市といたしましては、公開講座、生涯学習の実践、周辺の緑と調和したキャンパス整備や周辺と一体となった施設整備など、ソフト、ハード両面にわたり、従来にない、地域に開かれた大学となることが望ましいと考えておりまして、今後、積極的に大学側に働きかけてまいりたいと考えております。

次に、順序が前後しますが、移転跡地のまちづくりについての平成 5 年度の検討内容についての御質問にお答えをいたします。箱崎、六本松地区のまちづくりにつきましては、平成 4 年度の現況調査に引き続きまして、平成 5 年度におきましても大学と地域の関連や地域中心としての箱崎、六本松地区が果たしている役割など、地区の実態や現況の調査を行い、また、これらの分析や評価を行いまして、平成 6 年度より着手する予定の両地区の将来像づくりに生かしてまいりたいと考えております。

○議長（大神研裕君）　荻原都市整備局長。

○都市整備局長（荻原達朗君）　伊都地区の土地区画整理事業につきまして、お答えさせていただきます。伊都地区の土地区画整理事業計画は、全体構想約 180 ヘクタールを予定しておりますが、地区の開発熟度等に差異がありますために、4 地区に分けて段階的な整備を考えております。

まず第 1 点目の御質問であります、通称第 1、第 2 地区と呼んでおりますが、特

定保留地区約 105 ヘクタールの現在の進捗状況についてでございますが、これまで道路等の都市施設や土地利用の計画について検討を進めてまいりましたが、九州大学の移転が元岡・桑原地区に本決まりいたしましたことに対応いたしまして、大学とその周辺のまちづくりと調整を図る必要が生じてまいりましたので、現在、大学への玄関口となるという視点から見直しを行っているところでございます。平成 5 年度におきましては、計画づくりに当たりまして、地域の住民の皆様とより密接な協議が進められますよう現地に事務所を設置いたしますとともに、環境影響評価の作業に着手し、平成 6 年度の都市計画決定を目指してまいります。早期に事業化に取り組めるよう検討を進めてまいります。

また、福岡大学グラウンドを含みます第 3 地区約 28 ヘクタールでございますが、福岡大学のグラウンドにつきましては約 6 ヘクタールと面積的に広く、また位置的にも、伊都地区土地区画整理事業及び第 3 地区の中央を占めており、まちづくりの計画を進める上で重要な場所となってまいります。したがいまして、当グラウンドに対します取り組みにつきましては、福岡大学や関係者と十分に協議を行いまして、まちづくりの趣旨に沿うよう努力してまいりたいと思います。

次に、今出地区などの進捗状況でございますが、今出地区約 160 ヘクタールにつきましては、現在住宅・都市整備公団が現況調査を行いまして、区画整理事業の構想をまとめるため、地元と協議を行っているところでございます。田尻地区約 40 ヘクタールにつきましては、現在地権者の皆様が世話人会を結成されまして、区画整理事業についての研究を重ねておられます。また、北原地区につきましては、今出地区、田尻地区と一体的なまちづくりに欠かせない地区でございますので、今後地権者の皆様と協議しながら検討を行う必要がある地区と考えております。これらの事業化につきましては、九大の移転構想を踏まえまして、西部地域の中でのまちづくりとしての役割を明確にいたしまして、西部地域全体の一体的、総合的なまちづくりになるよう取り組んでまいりたいと考えております。

次に、交通問題でございますが、九州大学の移転先を含みます西部地域の交通計画につきましては、御指摘のように長期的、広域的な視点に立ちまして、周辺一帯のまちづくりと合わせた構想づくりが必要になると考えております。検討に当たりましては、地域のあり方を大きく変えるプロジェクトであり、また、現在のところ大部分が市街化が進んでいない区域でもありますため、先ほど例を挙げられましたように先人のまちづくりへの先見性にも学びまして、関係市町とも協議し、行政界にとらわれることなく、長期的、広域的な交通計画づくりに努めてまいります。また、JR 筑肥線の鉄道駅からの公共交通機関のあり方につきましても、後世に憂いを残さぬよう、先行的な導入空間の確保も必要かと考えております。いずれにいたしましても、今後専門家の意見を聞きながら進められますまちづくりの構想を踏ま

えまして、関係局とも協議をしながら取り組みを進めてまいります。

○議長（大神研裕君）　小川周一君。

○18 番（小川周一君）　ただいま、渡邊総務局長あるいは荻原都市整備局長から大変前向きな、真摯な御答弁をいただきまして、心強く感じるものであります。今後ともよろしくお願いを申し上げる次第であります。そこで、今御答弁をいただきましたことを踏まえまして、最後に市長にお尋ねをいたしたいと思います。

九州大学の移転を契機とした西部地域のまちづくりにつきましては、大学の移転予定地の元岡、桑原が周辺市町と隣接する位置にあること、また、道路などの基盤施設整備の面から、さらに大学周辺のまちづくりを一体的に進めていく上からも、周辺市町とも連携を図り、広域な面でも考えていく必要があると思います。そこで、周辺市町との合併問題も含め、西部地域のまちづくりについて市長の御決意のほどをお尋ねいたしまして、質問を終わらせていただきます。

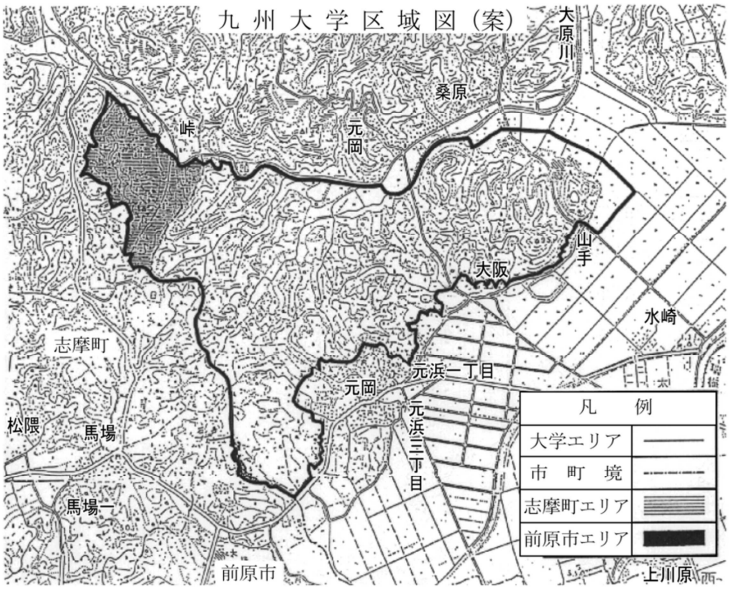
○議長（大神研裕君）　桑原市長。

○市長（桑原敬一君）　九州大学が元岡・桑原地区に移転するということは、大変福岡市の都市構造の上からも大きな計画であるというふうに思っております。私どもは、経験として筑波学園都市というのを知っておるわけでありますが、いまだに、まだ学園都市が成熟をしてないというふうなことも聞いております。それはやっぱり、既成のそういうまちとの連檐、あるいは生活のにおいのするそういうまちになっていないというところにあるかと思います。したがって、将来に禍根を残さないように、今御指摘のような元岡・桑原地区、そしてまた、周辺の市町村との連携というものが非常に重要ではないかなというふうに思うわけでございます。したがって、代表質問におきましてもお答えいたしましたように、周辺市町１市２町、そしてまた地域の方々と十分御相談をしながらまちづくりをしていくことが大事だと思います。高橋前学長が赤ちょうちんのあるまちと言うのはまさに象徴的な言い方でありまして、そこに人が生活をしてると、ただそこに大学があるというだけではなくてですね、開かれた大学、そしてそのまちの人々が本当に大学を愛するという雰囲気のものであってほしいと思うわけであります。そういった意味で、そういったものをつくることによって、そこから私は周辺の市町村が合併したいというお気持ちが出てくるならば、それは本当の合併の要求であろうと思います。合併というのは、福岡市からこうしようと言うのではなくて、その周辺市町村が合併することがより自分たちにとってまちの発展になるというお気持ちができたならば、私どもはそういう機運ができることは期待をいたしますし、また、いつでもそういうことに対応できるように、合併の問題についても真剣に取り組んでいきたいと思います。

〔後略〕

905　新キャンパス用地の概要（1993 年 12 月 10 日）

（「第 1244 回評議会記録」　1993（平成 5）年 12 月 10 日）



新キャンパス用地の概要

事項	元岡・桑原地区	志摩町桜井地区	前原市泊地区	合計・備考
大学用地面積	約 243ha	約 31ha	約 1ha	約 275ha
標高 (標高差)	121m～5m (116m)	119m～36m (83m)	85m～40m (45m)	121m～5m (116m)
土地利用状況	農地　約 100ha 山林 その他 約 143ha	約 7ha 約 24ha	約 0.1ha 約 0.9ha	約 107.1ha 約 167.9ha
地権者数 11 月末現在	703 人	112 人	7 人	822 人
埋蔵文化財	・包蔵地 14 か所 約 12.7ha	・S56　調査では包蔵地なし ・現在、志摩町において再度調査中	・包蔵地はなし	約 12.7ha

法規制関	都市計画区域	市街化調整区域	都市計画区域であるが未線引	市街化調整区域	
	農薬振興地域(うち農用地区域)	全域農業振興地域 (約 135.4ha)	全域農業振興地域 (約 7ha)	全域農業振興地域 (約 0.1ha)	農用地区域除外の県知事の許可が必要 (約 142.5ha)
	地域森林計画対象民有林	約 92.3ha	約 14.4ha	約 0.2ha	約 106.9ha 1ha 以上の開発は県知事との協議が必要
	土砂流出防備保安林	約 1.16ha	なし	なし	農林水産大臣による保安林指定解除が必要
	土地取引に関する監視区域	監視区域設定(300m² 以上)			
	福岡県環境保全に関する条例	3ha 以上の宅地を造成する場合は、県知事に届出(国は通知)をしなければならない。 *環境影響評価の実施が必要である。			

906　九州大学統合移転に伴う処分一覧

（「第 1250 回評議会記録」　1994（平成 6）年 6 月 28 日）

九州大学統合移転に伴う処分一覧（案）

H.6.6.28

地　区	面　積	内　　訳
箱崎地区	479,683 m²	①箱崎キャンパス内各部局等。 ②周辺地域における教職員、学生関係福利厚生施設。 職員会報・松浜厚生施設・テニスコート・第三学生集会所（三畏閣）・九大宿泊施設（浜の寮） 男子学生寄宿舎・女子学生寄宿舎 ③周辺地域における圃場等 家蚕遺伝子・農学部圃場（立花口圃場含む）
六本松地区	90,669 m²	六本松キャンパス及び教養部寄宿舎（田島寮）
農場地区	236,875 m²	農学部附属農場（粕屋郡原町）
その他	721,668 m²	省庁別職員宿舎、外国人宿舎（鳥飼） 演習林（早良演習林、粕屋演習林林地の一部） ①省庁別職員宿舎等

		部長宿舎　（早良区昭代） 宿舎（五）（東区箱松） 宿舎（六）（東区箱松） 宿舎（七）（中央区地行） 外国人宿舎（中央区鳥飼） ②演習林 早良区演習林 粕屋演習林林地のうち 21.5 ha

907　キャンパス検討委員会について

（「第 1280 回評議会記録」　1996（平成 8）年 12 月 10 日）

キャンパス検討委員会について

（平成八年十二月十日将来計画小委員会決定）

一　設置

将来計画小委員会要項（昭和四十六年十二月七日実施）四の規定に基づき、将来計画小委員会にキャンパス検討委員会（以下「検討委員会」という。）を置く。

二　任務

検討委員会は、九州大学におけるキャンパスの全体構想及び連携の在り方について調査審議する。

三　組織

1　検討委員会は、委員長及び次に掲げる委員をもって組織する。

イ　総長特別補佐　三人

ロ　文学部長、教育学部長、法学部長及び経済学部長のうちから選ばれた者　一人

ハ　理学部長、工学部長、農学部長、大学院システム情報科学研究科長及び大学院数理学研究科長のうちから選ばれた者　一人

ニ　医学部長、歯学部長、薬学部長、生体防御医学研究所長、医学部附属病院長及び歯学部附属病院長のうちから選ばれた者　一人

ホ　大学院比較社会文化研究科長、言語文化部長及び大学教育研究センター長のうちから選ばれた者　一人

ヘ　大学院総合理工学研究科長、応用力学研究所長、機能物質科学研究所長及び健康科学センター長のうちから選ばれた者　一人

ト　事務局長

チ　その他検討委員会が必要と認めた者　若干人

2　委員は、総長が委嘱する。

3　1の委員（イ及びトの委員を除く。以下 4 において同じ。）の任期は、二年とする。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4　1の委員は、再任されることができる。

5　委員長は、総長をもって充てる。

6　委員長は、検討委員会を招集し、その議長となる。

四　議事

1　検討委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2　検討委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

五　意見の聴取

検討委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の出席を求め、その意見を聴くことができる。

六　ワーキング・グループ

1　検討委員会に、専門の事項を審議させるため、必要に応じワーキング・グループを置くことができる。

2　ワーキング・グループについて必要な事項は、検討委員会が定める。

七　事務

検討委員会の事務は、施設部及び企画調査室において処理する。

〔註〕原本縦書き。

908　行きたくても行けない？　どうなる元岡移転

（『九大教職組』第 127 号　1997（平成 9）年 1 月 20 日）

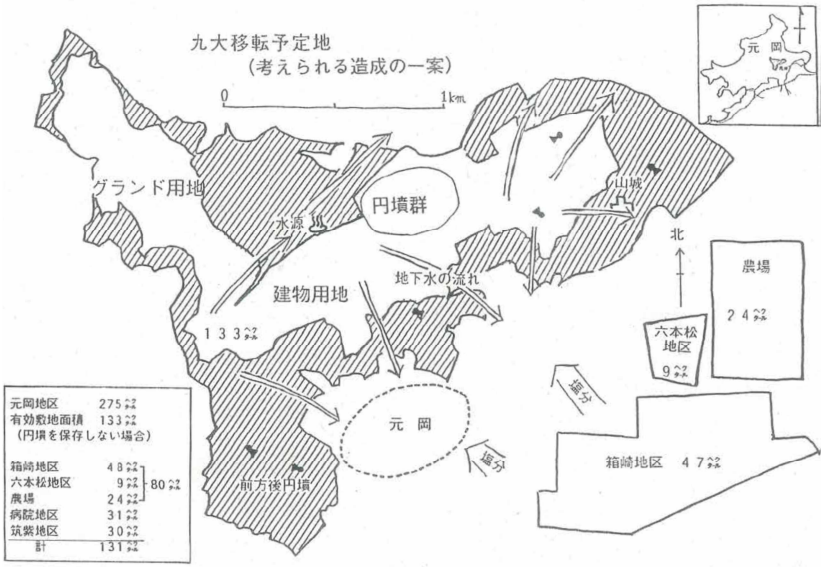
行きたくても行けない？

どうなる元岡移転　井澤英二教授に聞く

九大の移転問題について、新聞報道にもあるように 96 年は水、古墳、経費問題といくつかの問題が浮かび上がってきました。現時点での問題点について、組合の大学改革問題対策委員会委員長の井澤先生にお話しを伺いました。

水　周辺地域の井戸の塩水化の危険性が明らかに

井澤　水問題については、昨年 8 月 30 日に報告が出ました。「水問題ワーキング・グループ」（新キャンパス計画推進室の元に置かれた学内組織）が、93 年から始めた調査の中間報告です。詳細な調査に基づいた立派な報告書で、それを読む限り、新キャンパスの造成によって周辺地域の井戸が塩水化する可能性がはっきり示されていると



思います。

地下水の流れは、地下水面の等高線を見れば、およそのところは判断できます。水は等高線に対して直交する方向に流れますから、造成予定地から元岡の集落に向かう地下水の流れがあることは容易に推察されますね（図参照）。元岡の集落には生活・農業用の井戸が多数ありますが、そこには移転予定地に降った雨が地下水になって流れ込んでいます。キャンパス造成をやれば、当然、地下水の供給量は減るでしょう。一方、海の方からは塩水がしみこんできています。この 2 つの流れは、ちょうど集落のあたりで微妙なバランスを保っていますから、報告書にもあるように、「本学の開発により、平地への地下水の供給が減って、塩水が井戸水に混ざっていくという因果関係がクロースアップされる可能性がある」わけですね。どのくらいの規模で造成すると、どれくらい塩水化が進むか、という影響予測はこれから調査を継続して揚水試験なども行い、シミュレーションしなければならない。それがこの報告書の骨子です。

要するに、今の段階では万事 OK とはいえない。

井澤　きっちりと予測をしないままに造成すると、非常に無責任なことになるでしょうね。大規模に削って造成することに、大学として責任が持てるのか、という問題提起がされたと考えるべきでしょう。

元岡地区には、現在、水道が行っていませんから、生活用水のすべてを井戸水に頼っています。野菜などのハウス栽培が盛んな地域ですが、それにも井戸の水は不可欠ですね。将来、水道の設備ができたとしても、農業用水に水道水を使うわけにはいか

ないでしょうから、地下水の水質保全は重要な問題です。

さらに、キャンパス内の水供給の問題も目処がたっていません。これから詳細に検討するということですね。現地には井戸が掘れない約束なので、市から水道水を買って賄うことになるのでしょうが、コスト増は確実だと思われます。それに渇水の時は大丈夫なのか、心配ですね。福岡市は 10 年に 1 度は渇水に見舞われることが分かっていますから。

水が止まったら理系は商売あがったりなんでしょう？

井澤　そうですね。報告書のおかげで、これまで直感的に問題有りといわれていた事柄が、かなり具体的に明らかになったと評価できます。この報告書は、事前に連絡すれば推進室で閲覧できますよ。

古墳　九州考古学会が「全国的にも貴重な遺跡」と市の報告を批判

11 月 11 日に福岡市教育委員会の埋蔵文化財にかんする中間報告が出されましたが。

井澤　新聞報道によれば、「埋蔵物としてはそれほどみるべきものはなかった」とのことです。だから「それほど価値のあるものはなかった」という発表になった。これに対し九州考古学会が「価値がないというのはおかしい」と批判しています。

古墳のような文化財には、その地域一帯の歴史的意義や景観まで含めて、1000 年以上にもわたって築かれてきた価値というものがありますよね。この価値をどのように評価するか。考古学の分野ではこれからも調査が必要という点で一致しているわけでしょう。市の教育委員会も別に壊してよいと言っているわけではありませんから。

その調査に今後 7～8 年はかかりそうだということです。調査が進むにつれて眠っていた歴史が次第に明らかになるかもしれない。大学を建てるわけですから、結論が出ないうちに見切り発車で壊してしまうということには、おそらくならないでしょう。

前方後円墳や円墳群は、これまで計画されていた建物配置とぶつかりますから、計画の見直しは避けられないでしょう。組合では昨年 6 月に開いたシンポジウムで、この地域の歴史や文化財の意義について学習していましたから、ある程度は予測をしていたのですが。

経費　跡地を売っても 1000 億円足りない?

井澤　3 つ目に経費の問題がはじめて具体的かつ公式な形で出てきました。11 月 14 日の福岡市議会本会議の場で取り上げられたのですが、それによるとこれまで福岡市が費やしたお金は 432 億円です。全体としては、今後 2000 億円くらいが必要と考えられているようです。一方、学内では、九大跡地を売却したお金でこれを賄う方針だと説明されていますが、六本松・箱崎・農場さらには演習林の一部まで売り払っても、1000 億円ほど足らないんじゃあないか、という試算があります。現在の国の財政状況の中で、特別な理由もない九大移転に 1000 億円ものお金が出てくるとは、とうてい

信じられない。

それから 11 月 19 日の将来計画小委員会では、造成可能面積が 133 ヘクタールと報告されました。それも円墳群は破壊するとしての試算です。この 133 ヘクタールのうち建物の用地として使えるのは 80 くらいでしょう（残りの 50 はグランド用地など）。図を見れば判りますが、面積は現在のキャンパスと殆んど変わらないことになります。使える土地は横長で、幅が狭く、現在よりも条件が悪くなることが懸念されます。（図参照）。

移転の理由は消えた？もう一度、考えてみる時期に

本当に問題が山積しているんですね。

井澤　いま一度、原点に帰って移転問題をみんなで考えてみる必要があるんじゃないか、というのが私の感想なんです。

現在の移転計画はバブル経済の最中につくられ、91 年の秋に学長試案を承認して決定されたわけですが、このときの移転理由を思い出してみましょう。要するに、九州大学の改革に向けて「統合型キャンパス」が必要だ、というのが、唯一最大の理由だったわけです。飛行機の騒音が教育研究の支障になっているという問題も理由にあげられてはいましたが。

移転の議論では、全学部のキャンパスが一体化することが大前提でした。しかし、91 年秋の学長試案では、医学部地区と筑紫地区は移転対象から外してありました。95 年 3 月の評議会で病院キャンパスは動かないことを再確認しましたし、筑紫キャンパスも動かない。結局、箱崎と六本松だけが移転する計画になっています。これでは一体化どころか、現在よりも分散型になります。当初の移転理由は事実上、成り立たなくなっています。

医学部キャンパスのような現地再開発は出来ないのですか？

井澤　移転決定以前に工学部では 15 年計画で 10 階建ての建物群を作る計画があり、実際に建物配置図の図面までひかれていたんです。移転が決まる前には、そういう方向で議論がされていました。

移転の理由が曖昧になったいま、ここらでもう一度移転について自由な議論をしてみる必要があると思います。いろいろな意見があるでしょう。

1. 一日も早く移転したい。
2. 決めたことだから、移転する社会的な責任がある。
3. いまさら移転をとりやめることは不可能。
4. 元岡の 1000 年と箱崎の 100 年の歴史を破壊して、なお価値のあるキャンパスができるのか。
5. 水問題の解決策は……

移転計画が生きている限り、新規施設の予算はつかないという状況が続きます。九

大の大学院重点化は始まっていますが、いっさい建物が出来ないために改革の実態が伴わない。一番困るのは、中途半端なまま、これから 5 年、10 年と時が過ぎていくことです。学生にとっても、その間は厚生施設が建たないし、食堂の行列も解消されない、これは大変なことです。

福岡市も市長自身が「これは市のプロジェクトではない、九大が決めたこと」と答弁しているわけですから、九大で働く私達の問題として向き合ってみようではありませんか。5 年間待ったことですから、いまさら、あわてて結論を出すことではありません。新年を迎えて気持ちを新たに、基本に戻って議論を始めてみてはいかがでしょうか。

組合の情報が一番迅速・正確と言われるぐらい頑張って、学内議論をおおいに盛り上げていければと思います。どうも有り難うございました。

〔註〕原本縦書き。